

夏秋キュウリの晩播栽培法

岩館 信三・阿部 隆*・吉池 貞蔵*・高橋 慶一*

(岩手県園芸試験場高冷地開発センター・*岩手県園芸試験場)

Method of Late Sowing Culture of Cucumbers for Summer and Autumn Crop in Open-Field

Shinzō IWADATE, Takashi ABE*, Teizō YOSHIKAKE* and Keiichi TAKAHASHI*

(Highland Cool-zone Development Center, Iwate Horticultural
Experiment Station・*Iwate Horticultural Experiment Station)

1 は し が き

夏秋キュウリは本県野菜の最も主要な品目で、その収穫期間も7月上中旬～10月初めごろまでと比較的長期間に及んでいる。しかし、収量的にはその大半が7、8月に集中し、草勢が低下してくる9月以降の品質、収量の低下は著しい。

このことは、収量の向上をねらいとした作型の前進化に伴い、更に顕著に現われ、本県夏秋キュウリの大きな栽培上の問題点となっている。

そのため、生育後期の品質、収量の向上を主なねらいとした夏秋キュウリの晩播栽培法について検討したのでその結果について報告する。

2 試 験 方 法

(1) 播種期と栽植様式(昭和54年～56年)

播種期は6月1日播きを対照区とし、これより遅い6月15日播き、7月1日播き区をもうけ栽植様式との関係について検討した。

栽植様式はうね幅280cm、株間60cm、2条植を対照区とし、54年はうね幅220cm、株間60cm、2条植区、それにうね幅90cm、株間60cm、1条植区で検討し、更に55年からはうね幅220cm、株間45cm、2条植区を加えて検討した。

(2) 栽植様式と整枝法

整枝法は主枝数1～3本、それに放任区を設定し、栽植様式との関係について検討した。

栽植様式は試験1に設定した区以外にうね幅280cm、株間45cm、2条植区、うね幅90cm、株間60cm、1条植区を加えた。更に56年はうね幅90cm区を除去し、うね幅220cm、株間35cm 2条植区を加えた。

供試品種は試験1、2とも「北星」を使用した。

供試株数は1区20株の2区制とし、試験1の整枝法は2本仕立、試験2の播種期は6月15日まきで実施した。

3 試 験 結 果

(1) 播種期と栽植様式

夏秋キュウリ直播き栽培における慣行の播種期は、5月下旬～6月初めころであるが、この作型に比べ、全体の収量をあまり低下させず、しかも9月以降の生育後期の品質、収量が安定する播種期と栽植様式について検討した。

播種期と収量の関係では、全般に早播き区ほどまざる傾向はみられたが、6月15日播きまでは大差なく、7月1日播き区で著しく収量が低下した。

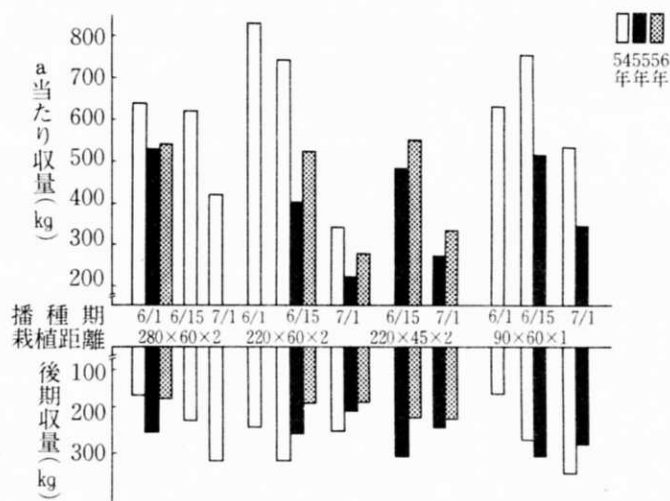


図1 播種期と栽植様式のa当たり収量と後期収量(9月以降)

9月以降の後期収量は、図には示していないが秋高温であった54年は遅播き区ほどまざった。しかし、冷害年の55、56年は6月15日播きと7月1日播き区では大差はなかった。図2に示したように6月1日播きと6月15日播きとの比較では6月15日播き区がややまざる傾向を示した。

次に栽植様式について収量が安定した6月15日播きでみると、密植区ほど収量がまざる傾向がみられ、後期収量でもほぼ同様の傾向を示した。しかし、うね幅90cm区は収量ではまざるものの、管理作業面では無理があり実用的でないと判断された。

また、播種期、栽植様式と品質との関係では、秋高温年の54年は遅播き区ほど良果率が高かったが、55、56年ではこの差は小さく、一定の傾向は認められなかった。

したがって、目的とする播種期と栽植様式は6月中旬播

きでうね幅220cm, 株間45cm, 2条植でよいものと思われる。

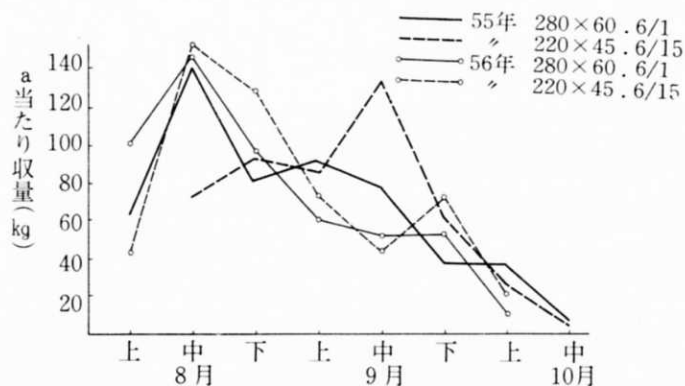


図2 時期別収量の推移

(2) 栽植様式と整枝法

栽植様式と株当たり収量では明らかに疎植区ほどまさっ

たが、a当たり収量はいずれの年においてもうね幅220cm区でまさる傾向を示し、株間は55, 56年とも同うね幅の45cm区がまさった。これら栽植様式の区は後期収量においても同様に収量は高く、慣行のうね幅280cm, 株間60cm, 2条植に比較し20%前後高かった。

次に整枝法については、主枝数を1～3本にし、主枝から発生する側枝は2節で摘心する方法で行った。ただし整枝打切りは8月中旬頃で、それ以降は放任とした。

この整枝法の違いと品質、収量の関係について、収量が比較的安定した前述のうね幅220cm, 株間45cm, 2条植でみると、全収量では2本仕立区がややまさる程度で大差はなかった。しかし後期収量では55, 56年とも2本仕立区がまさる傾向を示した。

これら栽植様式、整枝法と品質面では年次間差もあり、処理に一定の傾向は認められなかった。

表1 栽植様式、整枝法と収量 (a当たり)

試 験 区		良 果 (kg)	曲 果 (kg)	く ず 果 (kg)	合 計 (kg)	収量(良+曲) (kg)	収量比	後期収量 [※]	全収量比
55 年	280 × 60 × 2 2本仕立	189	162	94	445	351	100	260	100
	1本仕立	223	148	105	476	371	106	226	102
	220 × 60 × 2 2本仕立	230	167	107	504	397	113	255	98
	放 任	276	182	102	560	458	131	327	126
	1本仕立	288	229	197	714	517	147	331	127
	220 × 45 × 2 2本仕立	319	195	121	635	514	146	348	134
	放 任	308	193	159	660	501	143	323	124
	90 × 60 × 1 2本仕立	286	212	116	614	498	142	312	120
放 任	243	200	124	567	443	126	301	116	
56 年	280 × 60 × 2 2本仕立	253	187	123	563	440	100	170	100
	2本仕立	291	220	133	644	511	116	198	106
	3本仕立	257	204	145	606	461	105	180	106
	1本仕立	315	210	176	701	525	119	188	111
	220 × 45 × 2 2本仕立	314	228	176	718	542	123	211	124
	3本仕立	299	217	174	690	516	117	193	114
	1本仕立	327	216	193	736	543	123	188	111
	220 × 35 × 2 2本仕立	298	206	176	680	504	114	170	100
3本仕立	343	223	170	736	566	129	188	111	

注. 6月15日播種後期収量は9月以降の収量

4 ま と め

夏秋キュウリの収穫最盛期は7月下旬～8月上旬ごろであるが、それ以降は草勢の低下に伴い、品質、収量の低下が著しい。

このため夏秋キュウリの晩播栽培法を確立し、生育後期の生産安定化をはかるとして、播種期、栽植様式、整枝

法について検討した。

その結果、播種適期は6月中旬頃に認められ、栽植様式はうね幅220cm, 株間45cm, 2条植の主枝2本仕立で、全収量、後期収量とも安定することが判明した。

今後、更に収穫期の延長と品質、収量の向上をはかるため、パイプハウス利用についても検討する必要がある。